

仙湖祭で PBL(課題探求学習)の中間発表を行いました

—JICA 筑波国際センターの国際協力写真も展示—



1. 日 時 9月7日(土)、8日(日) 10:00 – 14:00

2. 場 所 水戸啓明高校・第3校舎1階教室

※仙湖祭でのグローバルコース文化研究発表

3. 展 示 (1) 1年生「地域国際交流」中間発表ポスター

(2) 2年生「グローバル イシューズ研究」中間発表ポスター

4. 内 容 (1)1年生が取り組む「地域国際交流」とは

“Think globally, Act locally”と言われるように、地域社会の問題点から研究課題を発見して、探求し、解決策を見出していくことから水戸啓明のグローバル教育は始まります。さらに、市内には約3,200人の外国人が暮らしている。外国人と同じ目線で課題解決の方法を探る多文化共生も現代社会では欠かせない学習になっている。この「地域国際交流」は、生徒が4人以内のグループをつくり、地域在住の外国人や大学に留学中の外国人留学生と協働して地域の課題解決に取り組む PBL(Project Based Learning : 課題探求型学習)と多文

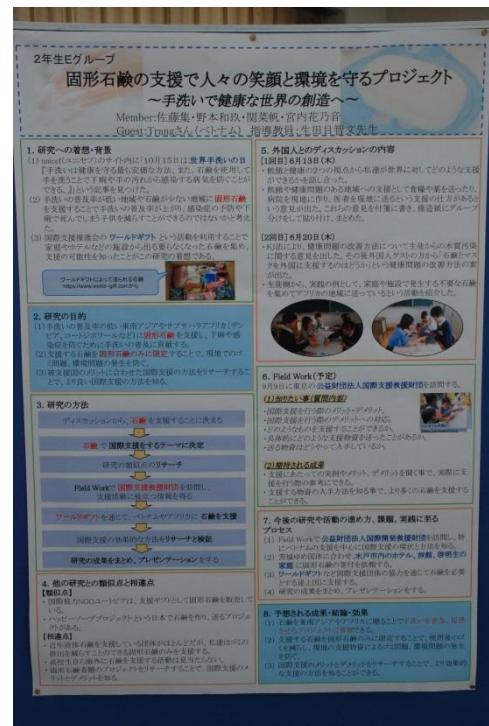
化共生学習を融合した取り組みです。生徒は、外国人とディスカッションを重ね、関係機関に現地調査（フィールドワーク）に出かけて得た情報を中間発表として模造紙1枚のポスターにまとめて発表しました。



(2)2年生が取り組む「グローバル イシューズ研究」とは

1年次に「地域国際交流」を経験した2年生は、生徒4人以内のグループを作って、地域在住外国人や大学に留学中の外国人留学生と英語でディスカッションしながら、世界の問題（グローバル イシューズ）に課題を求めます。貧困問題・難民問題・食糧問題・環境問題・国際支援・ジェンダー・SDGs などから研究課題を見つけ、探求し、解決策を見出します。特徴は、外国人とは全て英語でディスカッションし、最終的な解決策を英語でプレゼンテーションすることです。将来、外国人と一緒に様々な仕事をするための基盤を育成するのが目的です。外国の事情や外国人を知り、外国人と英語でコミ

コミュニケーションするスキルを身につけます。ただし、グローバル教育は高校3年間で育成できるものではありません。大学に進学してさらに教養を修め、社会人となって留学や職場でのOJT(On the Job Training)を経て深化させるものです。その基盤育成のためにグローバルイシューズを課題として、外国人と英語で関わる機会は貴重な体験です。今回は、ディスカッションの内容やフィールドワークの結果、今後の研究計画などをポスターにまとめて展示しました。各グループに1名ずつ配置されている研究指導教員の厳しいチェックを受けて、昨年までのポスターを凌ぐ高いレベルのポスターができあがりました。



5. JICA 筑波国際センターと連携して、国際協力写真パネル展を行いました

JICA 筑波国際センターとは、グローバル・フロンティアコース設置以来の関係を保っています。JICA 筑波が年3回実施している「国際

理解教育実践セミナー」には、本校から欠かさずグローバルコース担当教員が参加しています。また、JICA 筑波に海外から研修に来ている外国人の派遣を受けて、年1回交流会を行っています。過去にはグローバル イシューズ研究のフィールドワークで生徒が JICA 筑波を訪問したこともあります。以上のように国際支援のエキスパートである JICA（国際協力機構）筑波国際センターは、開発教育やグローバル教育には欠かせない存在になっています。今回は、JICA 筑波から、アフリカでの青年海外協力隊員の活動状況を撮影した写真パネルをお借りして展示しました。特に来場者の注目を集めたのは、15kgの水の入ったバケツを頭に載せ、長い家路を歩く少女の写真です。水を15kg入れたポリタンクを置いて「体験コーナー」を設置したところ、多くの来場者が体験しました。体験した人はいずれも水の重さを実感した反面、水道の整備された日本に生まれたことを改めて感謝しているようでした。



アフリカ「水くみ体験コーナー」



ポリタンクを頭に載せて体験する来場者

6. ポスター展示と来場者への説明の様子

1年生・2年生とも各グループから説明担当者を出して、来場者に研究の説明を行いました。



熱心に説明を行う 2 年生



中学校時代の同級生に説明



熱心に説明を聞く保護者



1 年生も説明に慣れてきたようです



大勢の来場者がありました



ラオスやケニアなどの民族衣装も展示